

(59)0206 南イタリアのリゾート

111505 締め切り 111505 提出

ボローニャで ESAO・INFA

2005年10月初めイタリアのボローニャで開催された ESAO (European Society for Artificial Organs) / INFA (International Federation for Artificial Organs) 合同会議に出席し、その後、ローマと南イタリアのリゾート地へ行ってきました。ボローニャの会議では、「維持透析患者に対する補完・代替医療」の講演をしたのですが、旧知の Dr. Klinkmann が最初にわたしを友好的に紹介してくれ、終わりに future direction を示すものとコメントをしてくれたこともあって、全体に好意的な内容の質問を受けました。補完・代替医療については、すでに、イギリスでは healing (手かざし療法の一種)、ドイツでは homeopathie (薬理作用のある物質を含む水溶液の極端な希釈液を投与する療法) が健康保険適用となっているといわれ、わが国に

おけるよりも補完・代替医療を受容する機運が強いのではないかと感じられました。

ボローニャにヨーロッパ最古の大学

ボローニャはイタリア中北部に位置し、ヨーロッパで最初に大学ができた由緒ある都市として知られています。古い大学の建物は美術館的に残されていて、新しい大学が街の中心部に近くあるのですが、そのせいか、街で出会う若い人たちは皆比較的きちんとした人たちと見受けられました。同時に食の街としても知られています。野菜を煮込んだ土地の家庭料理風の食べ物が印象に残りました。もともと、イタメシの好きなわたしですが、パンがおいしい、ハム・チーズがおいしいに始まり、デザートジェラートがおいしいまで、食事の自己制限に旅行中ずっと悩み放しでした。

ローマで危うく盗難に

ローマは、街全体が美術館みたいなところ  
です。街角を曲がると遺跡、もう少し行くと  
大理石の彫像が立っているといった有様です。  
観光地として意識されるのは、20数年前一度  
行ったことがある思い出によるより、若い頃  
に観たオードリー・ヘップバーンの「ローマ  
の休日」の強烈な印象によるのではないかと  
思われます。

ところで、明治の文明開化の時期にヘボン  
式といわれるアルファベットを用いた日本語  
の表記や、医師として（眼科の医師かと思っ  
たら内科の医師で、当時日本には眼疾患の患  
者が多かったので結果的に多くの眼科の患者  
を診た）著名なヘボンは、キリスト教の布教  
を志して日本へ来た米国のDr.ヘップバーン  
だったので<sup>1)</sup>。

ローマでは危うい経験をしました。映画で  
新聞記者役のグレゴリー・ペックが口の中に  
手を入れて、手を噛み切られたと大騒ぎにな  
った教会の彫像の前で写真を撮る順番を待つ

列に並んでいたときのこと、後ろの人が妙に密着して並ぶのが変な感じでした。そのうち、背中に背負っていたわたしのリュックサックがなんとなくもそもそもするのです。少し場所を変えて立っても、また、なんとなく人に触られているような感じがありました。リュックサックを肩からはずして見ると、なんと二重になっている蓋が開けられていたのです。後ろに、密着して立っていた若い女性2人と男性が、「私たち何もしないよ」と英語でいうのです。身なりは、きちんとしていて泥棒らしくありませんでした。でも、何も尋ねないのに、「何もしないよ」は「何かしたよ」の意味じゃないですか。リュックサックには、パスポートと航空券が入っていました。抜かれる寸前でした。以後、それらはホテルのセーフティボックスに入れておくことにしました。

イタリアの靴先にあるポジターノ

ナポリからレンタカーで長靴形のイタリアのつま先部分にあたるポジターノ (positano) に移動しました。途中、ナポリ・ソレントを通過しましたが、われわれがイタリア民謡として知っている多くの歌の誕生の地域だったので。民謡の中にある「フニクリ・フニクラ」って何のことかと思っていたのですが、ロープウエーの登山電車がイタリア語でフニクラレ (funiculare) であることを発見しました。

海から数百メートルもそそり立つ岩壁に家々がへばりつくように建つ周辺一帯は、世界遺産なのです。テレビなどで見ていて、是非、一度は自分の目で見て、絵に描きたいと願っていた景色でした。海岸沿いにあるポジターノのホテルへ行くには、駐車場を取るスペースがないので曲がりくねった細い道路の端に止められた車の間をヨロヨロと降りて行かなければなりません。最後は、ホテルから500メートル以上も離れたところで車を降り

て、電話をかけて荷物はポーターに別に運んでもらうのです。ホテルの名前は、covo dei saraceniです。サラセンは、イスラム・アラビアの意味ですから、十字軍やアラビア勢が何回も行ったり来たりした地域なのです。ホテルのシャンデリア・手すり・イス・机の飾りには、いわゆる唐草模様・サラセン模様が多く取り入れられているのに気がつきました。

#### シシリー島のタオルミナ

旅の終わりは、シシリー島のタオルミナ (taormina)です。ホテルは古い僧院を改築した San Domenico Palace Hotelでした。この種のホテルに泊まったのは初めてですが、石造りの僧院の堅牢さ・壮麗さを偲ぶことができる素晴らしい造りでした。いつも思うのですが、日本の寺社は一般に質素で、われわれにとって、それなりに納得のいくものですが、キリスト教系の教会・僧院などの多くは理解に苦しむほど華麗で、見るからに莫大なお金

のかかったものであるのが不思議です。

イタリア人は、日本人に負けないほど、あるいは日本人以上にいろいろのキノコを食べます。このホテルでは、形はシイタケ似ですが、食感はマツタケに近いキノコを食べました。マツタケほどの香りはありませんでした。海に近いので新鮮な海産物のイタメシにありつけると楽しみにして行ったのですが、日本人のように新鮮さ（活き）を気にする習慣がないせいか感激するものには当たりませんでした。しかし、やはりホームメイドの生のパスタは絶妙においしかったのです。マカロニを頼んだところ、海産物と野菜を詰めた直径3センチ・長さ5センチほどのマカロニが数本皿の上に立って出てきたのには驚きました。われわれがイメージするマカロニは、もっと細いのですが、機械で引いて乾燥をしたものだからでしょうか。イタリアでイタメシを食べるようになって気がついたのは、オリーブ油のおいしいことです。日本に運ばれて来るま

でに、オリーブ油が変質するのでしょうか、あるいはいいオリーブ油を輸入していないということなのでしょう。

外国へ行くと、風俗・習慣・ものの考え方に興味が湧きます。イタリア人は、どこでもタバコを吸い、どこでも携帯電話をかけます。空港の行き帰りのタクシーで、運転手が携帯電話をかけながら高速道路を時速100キロ以上で運転するのは恐ろしい経験でした。それでいて、高速道路で追い越し車線は猛烈なスピードで走るのですが、追い抜くと走行車線に例外なくきっちりと戻るのは、日本人にない良い運転習慣と思われました。

文献

1) 小田泰子：医師へボンとその時代、丸善  
仙台出版サービスセンター、仙台、2004年。

挿絵 ボローニャの街角

ボローニャは古い街です。商店街の軒先を太い石の柱で支えた屋根で連ねている柱廊が、延々と続いています。ちょっと、街角を曲が



って裏道に入ると、古めかしいレストランがあります。古いイタリア映画の時代にタイムスリップ。。。